

金属を用いて道具を模造した。その道具の多くは、既に世の中にありふれたものである。しかし、それらの道具を自分で作ってみたとき、手元に道具が一つ増えたという事実と、その作り方を知っているという実感において、自分のもつ手段を多様にできたと感じる。

一方で、金属は自然界に存在する物質であるにもかかわらず、いまだに私は他人の手によって加工された状態でしか加工の術を知らない。それゆえに金属という素材自体が人工物であるという感覚がある。他人の手によって既に加工されたものをまたさらに加工しているという実感は、自身の制作が社会における生産業の一部であるということへの感覚にも繋がっている。

その自己と社会の接続の中で、効率的に形の決まった道具を分解したり、くっつけたり、単純にしたり、ひっくり返したりすることで、既に名付けられた物と物の境界がイメージではなく、事実として存在することを目指した。

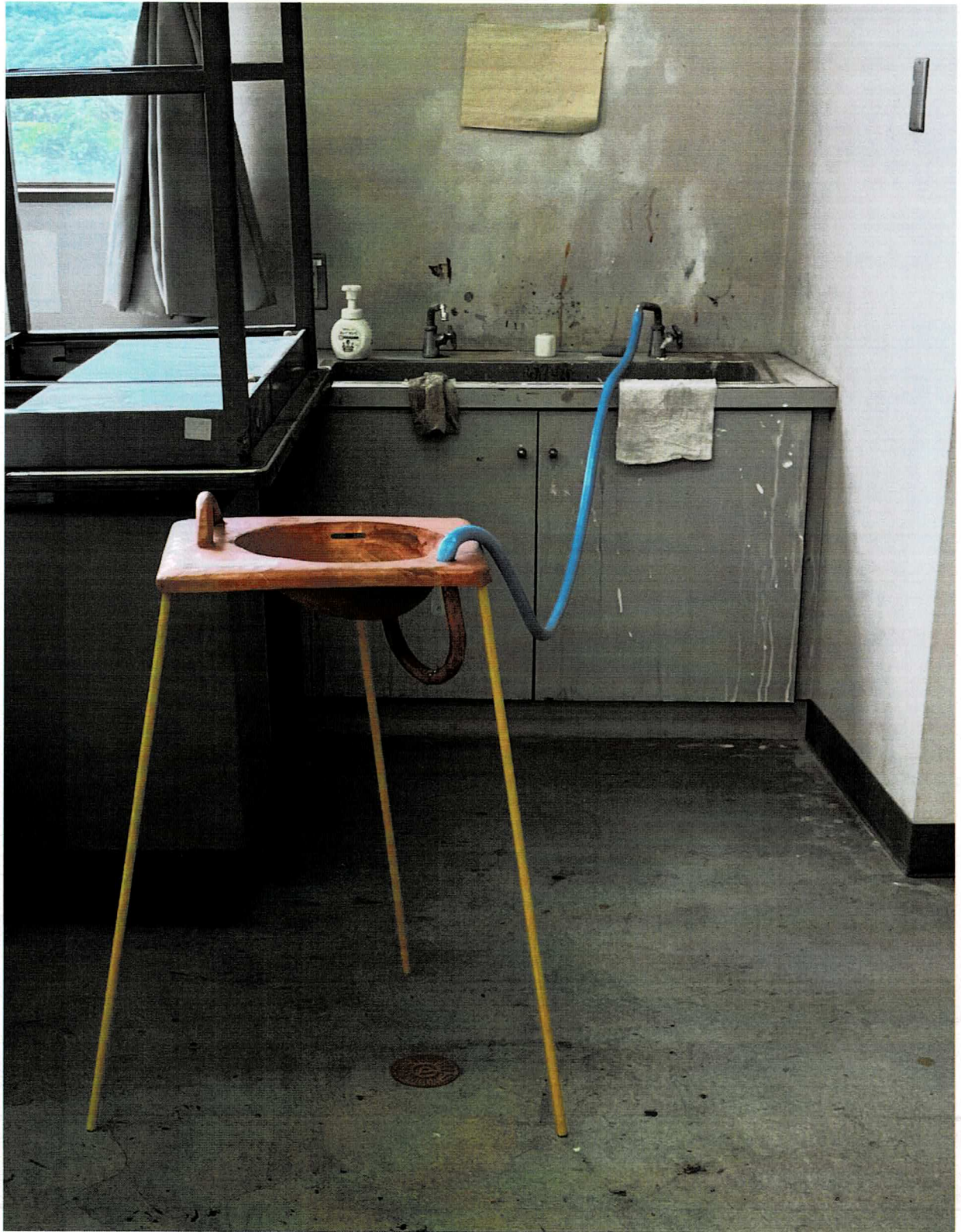


I think with sink

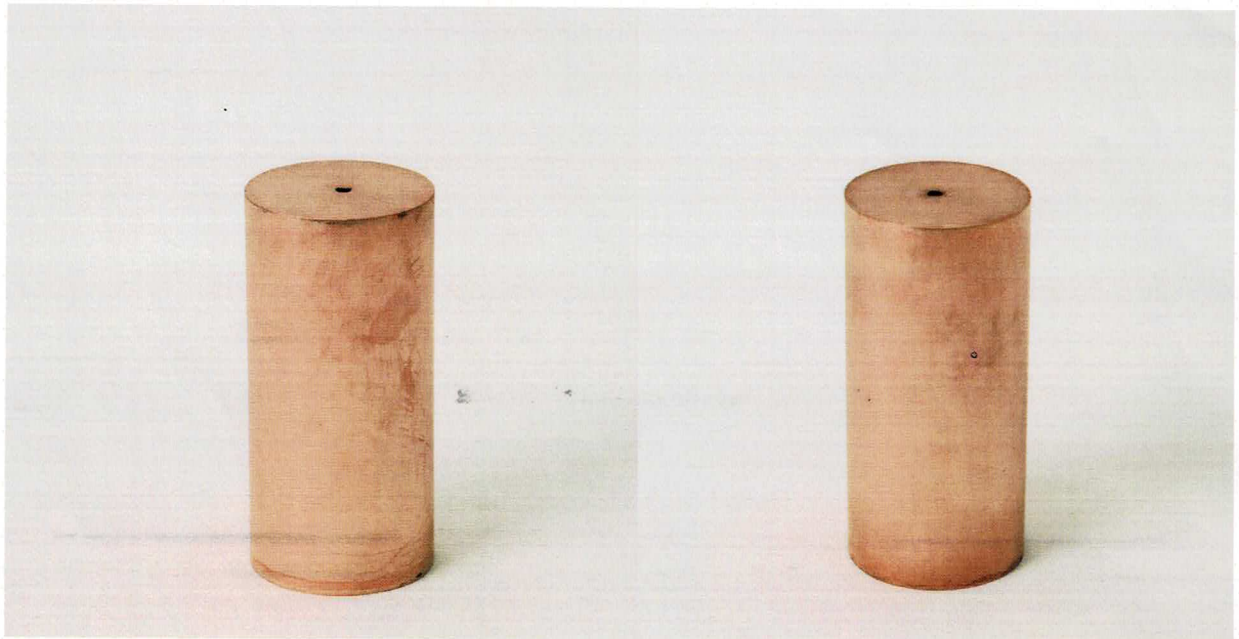
330 × 450 × 250

銅

2023



水の流れる様子を水の通り道としてのシンクで可視化しようと試みた。

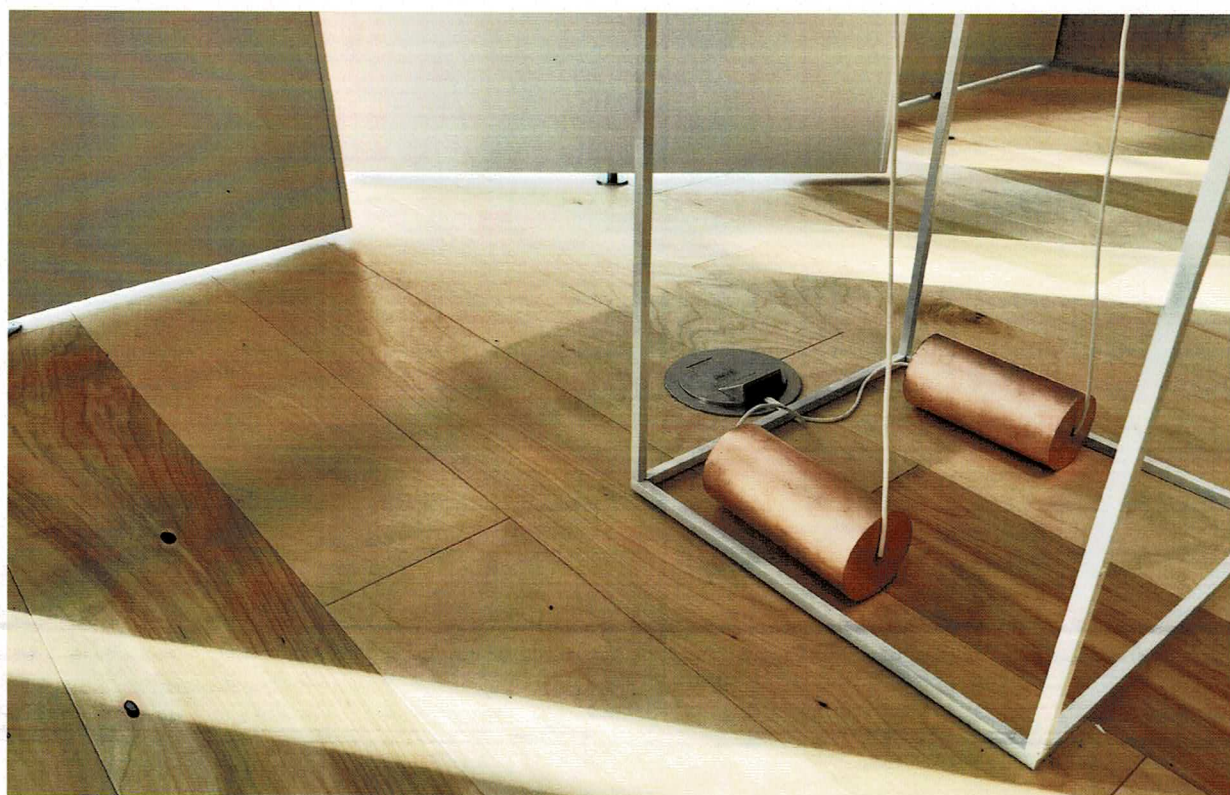


あたたかい置物

サイズ可変(本体φ75×145mm)

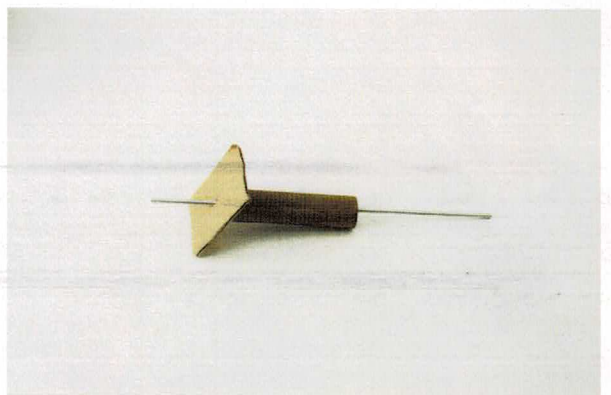
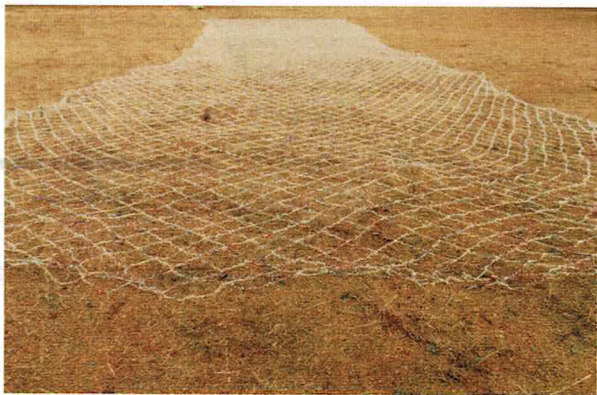
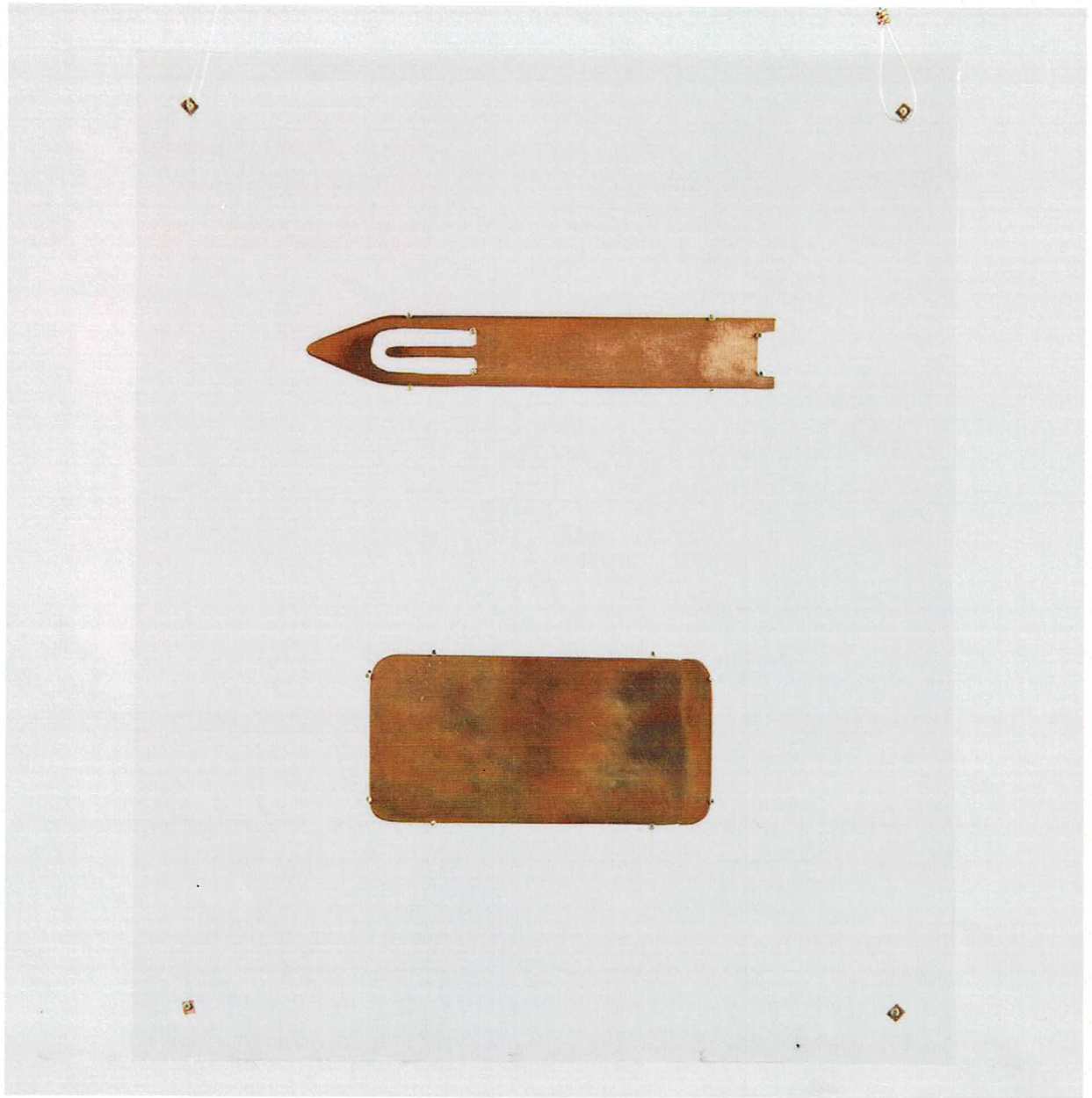
銅

2023



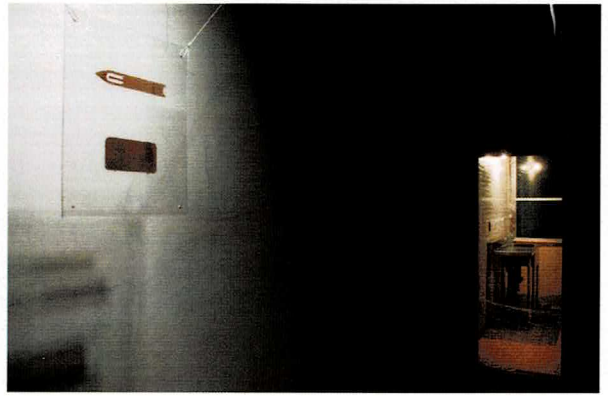
銅で制作した置物を発熱させ、その回路にもまた銅製の部品を仕込むことによって暖房器具を自作することを試みた。

実際作動させた結果、温度上昇による銅の酸化が見られたため、火事になることを恐れ、約45分で作動を停止した。その場で咄嗟の安全管理をおこなったことで、結果的に暖房器具が火に還元されたのではないかと感じた。



網を編むこととそれに付随するもの少々

サイズ可変  
銅、アクリル板、網、スピンドル  
2022



網を編むための道具を自作し、その道具で網を編み、その網を展示会場を片付けるために使用した。展示会場には本来取まらない道具や会場に元から存在する家具などの「作品ではないもの」と「作品」の境界を曖昧に保つことで、特定の環境や規則によって不可視化されるものを見つめてみようと考えた。展示風景 :2022「ざこね」(石川県/山岸薬局ビルディング) 撮影:吉川永祐



銅と真鍮の指輪

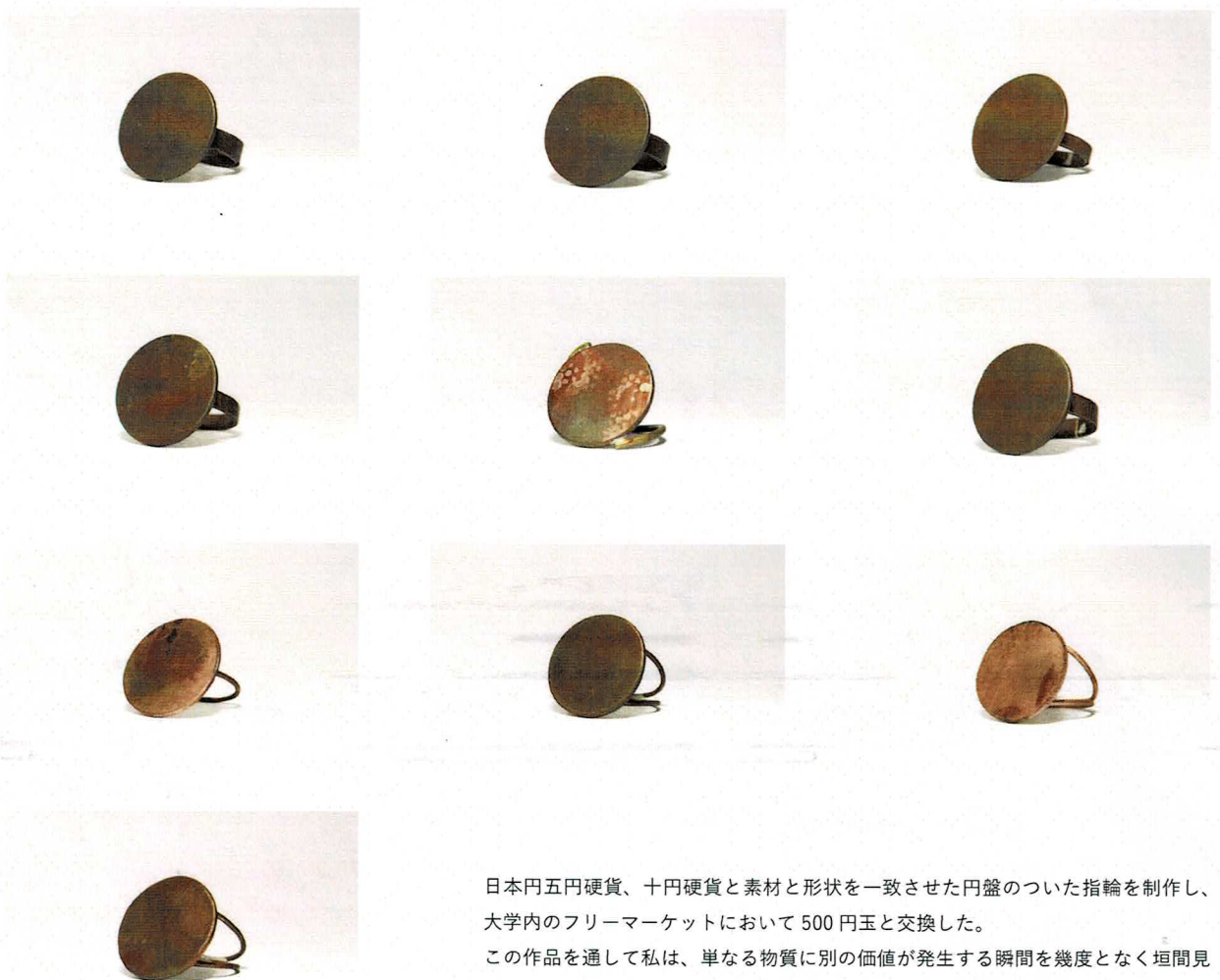
φ 22 × 20

φ 23 × 20

銅、真鍮

2022





日本円五円硬貨、十円硬貨と素材と形状を一致させた円盤のついた指輪を制作し、  
大学内のフリーマーケットにおいて500円玉と交換した。  
この作品を通して私は、単なる物質に別の価値が発生する瞬間を幾度となく垣間見  
た。それはこれが思い浮かんだ瞬間であり、板を切り抜いた瞬間であり、人の目に  
触れた瞬間であり、別の金属製の円盤が戻ってきた瞬間である。